

伊藤整全集

第九卷

伊藤整全集

9

新潮社版

編纂

瀬沼茂樹

平野謙

小田切進

奥野健男

伊藤整全集

— 9 —

© Sadako Itō
1973. Printed
in Japan.

乱丁，落丁本
はお取替えい
たします。

虹・花と匂い

定価二〇〇〇円

昭和四十八年八月十日 印刷
昭和四十八年八月十五日 発行

著者 伊藤 整

発行者 佐藤 亮一

発行人 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一電話
東京二六〇一一一一郵便番
号一六二振替東京八〇八

印刷所 株式会社精興社

製本所 株式会社大進堂

伊藤整全集 第9卷 目次

虹

五

花と匂い

一六

*

編集後記

瀬沼茂樹 五三

伊藤整全集 第9卷 (小説)

虹

安芸重吉が会場に着いたとき、高原画伯の還暦を祝うカクテル・パーティーはもう始まっていた。千代会館の三階の昇降機を出たところに受けつけがあり、高原画伯のマネジャーを兼ねている弟子の山根が、タキシードをきちんと着て、別人のような感じでそこに坐っていた。そばにはもう一人弟子らしい青年がいた。そこで署名をし、会費を払うと、山根は安芸を控室らしい細長い室を通り抜けて、本会場へ案内して行った。

彼は入ってすぐの所に立ったまま、かなり広い会場のあちこちに立っている百人ほどの人々を眺めた。このカクテル・パーティーに集まった画壇関係者たちのうち、半数ぐらいが自分の顔見識りらしい、と彼は思った。派手な感じの薄い紫一色の訪問着を着て、主賓の高原と、真中のテール・ブルの角で立話をしているのは、新進の女流日本画家のうちで才能があるという評判の水谷暁子であった。暁子の方を見ながら彼は、仕事のうまく行っている人間は、表情に自信があり、大胆なものだ、と考えた。白髪にはなったが、

艶のいい顔をして、少し狡そうに見える鋭い目の高原は、その暁子に軟かい優しい笑顔で受け答えしていた。ふと高原は、誰かに見とがめられるような警戒の仕方で入口の方を見、そこに安芸重吉を見つけた。すると高原は、安芸が予想してもいなかった鄭重さで彼に頭を下げた。言葉をかけるには少し距離が遠かったが、その表情は、わざわざ来て下さってどうも、と言っていた。安芸は、卑屈にならない程度でもっと鄭重に腰を屈めた。

安芸重吉は、自分が芸術家でもなく、また批評家でもなく、美術出版業者という商売人であることを、こういう席では忘れぬように気をつけていた。顔を上げて見まわせば、彼の方から挨拶しなければならぬ人間ばかりがあたりを満ちているようなものであった。彼は知人のそばに近づかぬようにした。また話し込まねばならぬ人間には、遠くから頭を下げるだけにしておくように気をつけ、なるべく知らぬ人間の近くに立っていた。

二三人の給仕たちが、素早い、しかし目立たぬ歩き方で、ウィスキーに水や炭酸水を割ったのや、二三種のカクテルを盆にのせて持ちまわっていた。安芸重吉はその中から水割りウィスキーを手を取った。何かを飲まねばならぬ。今夜は車を運転して来ていた。しかし今日の午後自分の起したことの不安が、彼の身のまわりに凝縮した空気を作って、

彼を閉じこめていた。その固い気持から少し楽になるために彼は酒に手を伸ばしたのだ。彼は水割りウィスキーを少しずつ飲みながら、内側が熱している自分の顔に面をかぶったような気持で、壁に近いところに立っていた。彼のすぐ傍には、高原画伯の縁者か何かに当るらしい七十ぐらいの弱り切った老人が、この室に四五脚しか出されていない安楽椅子の一つを占領して、じっと坐っていた。画壇とか名声とかいうものに無関係な人間の素朴な表情で、老人は自分の老齢をいたわって椅子を占領していながら、それにおどおどしていた。

安芸重吉はその場所をちょうどいいと思った。彼は言わば商人であり、こういう派手な場所では、目立たぬようにしているのが礼儀でもあった。だが、もし、この会場を歩きまわって、画家や批評家たちに挨拶し話しかければ、ときにはその中の誰かをきこちなくさせるほど自分が重視される存在であることも彼は知っていた。カラーフィルムと多色印刷術の進歩が美術出版業者としての彼の地位を、父の時代には考えられなかった高いものに行っているのだった。美術は複製によって鑑賞されるのが普通になりかかっていた。一流画家というものは、文士たちと同じように、出版物によって地位が定まり、やがては主たる収入も複製から得ることになる、という気配を安芸重吉は近い将来に

見通していた。

安芸重吉はじっとして、一時間前に甲斐弘子と自分との間に起ったことのイメージを、興奮と不安の混った気持の中で確かめ味わっていた。その出来事のイメージは薄いガラスでできた花のようで、もし押しつぶされると粉々になって形が失われてしまうようであった。甲斐弘子と彼との間に起ったことは、自然の花のようではなかった。薄い半透明の人工のガラスの花に似ていた。半年ほど前に安芸が、ヴェニス の裏町の硝子細工の工場で見た皺だらけの頬をした老熟練工が、鉄のパイプの先で吹いた軟かいガラス玉を、細い鉄のヤットコでひねったり、押しつけたり、伸ばしたりしながら、瞬く間に作って見せた桃色の薄い花瓣を持った薔薇の花に似ていた。

そのことの起ったあとさきの事情を、内側から湧き立つような不安定な気分のなかで、確かめるように描き直していた。そういうことが彼と甲斐弘子との間に起りそうな気配は前からあった。しかし、自分はもう女性とのそういう事件は起さないだろう、と彼は思っていた。結婚してから十年あまりの間に、彼は三度妻の容子を裏切った。そこまで行かないような火遊びめいた女性との近づき方は、もつと度数が多かった。その三度のうちの二度は容子に感づかれた。その度に容子はひどく傷つき、苦しんだ。その容子

の苦しみのために彼もまた苦しんだ。妻をこんなに苦しませてまで自分はよその女に引かれる気持を断ち切ることができないのか、と安芸重吉は幾度か自分の心の中をのぞいて見た。彼の心の中は暗い洞穴のようであった。それは解答を与えず、いつまでも満たされないままにいる暗い男性の渇きというものを感じさせた。おれの仕事が良くないんだ、父の作った土台の上に立っているおれの仕事は、本当の満足をおれに与えていない。そのせいだ、と彼は思った。

この三年のあいだ彼を善良な夫にさせておいたのは、妻の苦しみを再び見ることの怖れであった。妻への愛というものとはどこか違っていた。それはむしろ自分の心の平安のためであった。自分になまなく応える妻の苦痛の記憶が、彼をすべての女から押し隔てていたのだ。だから甲斐弘子との間に何事かが起りそうなのを予感し、期待する気持が次第に高まって来ていても、自分はそういうことを起さないだろう、起し得ないのだ、という、諦めに似た安堵感がいつも彼の中にあった。その安堵感は透明なプラスチックの袋のように彼を包んでいた。自分が手を伸ばして、外界にいる女たちに触れる気づかいはなかった。それに仕事の上でしょっちゅう逢っている弘子にも触れるはずがなかった。彼は日常の仕事の間に多くの女たちに逢っていて、絶えずその美しい顔、姿、粧いを見、彼女等に話しかけ、彼女等に反応していた。しかし彼女等は、彼を包んでいるその透明な袋に触れ、衣摺れの音や笑顔をかすかに残すだけで通り過ぎた。彼女等は彼の身辺にいながら実在しない女性たちのようであった。そして彼の日常は、計算し、応接し、交渉する仕事の連続と、家庭で容子や子供の明と食事をしたり、日曜日に自分の車で妻子を連れて出掛けたりする生活以外には、何の変ったことも起らなかった。

人妻であった栗須葉子との情事が終ってから三年経っていた。三年は長かった。そして今の当り前な生活が彼には次第に息苦しくなってきた。彼は妻と子を妻と子として愛しているにかかわらず、家庭というものを好きになれなかった。しかし容子は、彼が家庭を厭がることを知り、それを彼が妻を愛していないということに受け取っていた。その容子の前で彼は本心を吐き出すことができず、静かに家庭の中に、息も絶え絶えにおさまっていた。

その透明な、胎児を包んでいる薄い膜を思わせる包みが今日破られたのであった。彼があのかめられた白い襖の前で、立ったまま弘子を抱き寄せたとき、彼が感じたのは、弘子の魅力に負けたとか、彼女への愛情がおさえ切れなかったという気持ではなかった。彼が自分を包む透明な袋を破って出たというのが、その実感であった。そして彼の手に抱かれていた弘子の髪、弘子の背中、彼の唇がふれてい

る濡れた弘子の唇と齒のかちかち鳴る音を通して、外界の新しいさわやかな空氣が自分の存在のまわりを流れはじめたことを感じ、また外の世界にいた弘子という女性が自分の觸覚の中の実在になったことが確かめられたのであった。

それは弘子に触れることによって破られたのだ。弘子は彼のまわりに、谷川のせせらぎで洗われたような新鮮な空氣を吹き込んだ。弘子の唇には洋菓子のような甘い匂いがただよっていた。それは弘子の簡素なスーツの襟についている白い細かな刺繡の飾りから匂って来るようでもあった。弘子の唇は、彼の唇に押されて頼りなく開き、齒がかちかちと触れ合った。それ以上弘子は、彼の唇や舌での感覚的なたわむれに応じようとせず、ただ彼の厚ぼったいホームスパンの上衣の背に手をのばしたままそれに力を込めてじっとしていた。

そしてもうその時から、安芸重吉の不安は始まっていた。その新鮮な空氣の流れが、そのあとに続く冷たい、暗い、女性全体の狂氣のようなものの襲来を予感させた。それはまた始まったのだ。それが始まった以上、彼の世界には不安と怖れが呼び起されずにいることはなかった。しかし弘子の心持ち赤い髪、白い額、切れの長い目の動かない瞳は、いま彼の腕の中にあった。一年以上もの間、彼の心に焼きつけられていたその美しい姿を、腕の中に感じているとい

う喜びに彼の心はおののいていた。

そこは彼の事務所、安芸出版社の三階の和室であった。

一階は倉庫兼発送部、二階は編輯室で、それぞれ五十坪ほどの面積があった。三階には参考資料をまとめてある大きな図書室の外に、安芸重吉が自分だけで使う洋間の書齋と、時々寝泊りもする十畳の和室があった。

その日安芸重吉と弘子は、彼女の父甲斐青洋の画集の解説をすることになっている美術批評家の関直助の来るのをその書齋で待っていた。約束の時間が一時間以上も過ぎた。二人の間の低い卓には、製版のできた分の校正刷りが並べられ、また弘子の作っている父の年譜の原稿が置かれてあった。そうして、弘子と二人きりで坐っている時間が続いているうちに、安芸重吉は時間というものが厚い濃厚なゼラチンのような実在に思われて来た。ときどき弘子の白い手が校正刷りを裏返しに窓の方に持ち上げた。図柄を確かめるためである。しかし安芸には弘子が必要もないのにそういうことをしていると思われた。何かが迫って来ている。それを避け、それに気づかぬ振りをするのがこの弘子は下手なのだ、と彼は思った。

「この赤は山際さんのあの絵のように行くといんですけどね」と言っていて、安芸は靴を脱ぎ、座敷の壁にかけてある山際清の絵の複製の前に立った。弘子がだまって彼の後から

上って来て、座敷に入ると襖に手をかけ、何気なくそれを閉めた。それを安芸はちらと見た。この人の習慣だ、と彼は思った。しかし弘子は、自分がわざとのようにそれを閉めたことにすぐ気がつき、その顔色がすうっと蒼ざめたようだった。その顔を安芸が見ていた。弘子が襖に近づき、また襖を開けようとした。

「いや、構いません」

その言葉で、安芸は彼女の不安をなだめようとした。しかしその言葉は、二人の間に登りつめて来ていた緊張を実在化した。襖を開ける彼女を留めるかのように、でなければ弘子を連れて来ようとするかのように安芸が彼女の方へ二足三足近寄った。そのとき弘子が両手を前に出して安芸を防ぐような身振りをした。安芸はその身振りに招き寄せられたように、もう一步近寄って彼女の肩に手をかけた。もう避ける道はなかったのだ。今は、この場合は、こうする外なかった、と彼は絶望的に感じた。

抱いたまま唇を離すと、彼は弘子の耳を髪の中から自分の唇で探り出すようにして、小声で囁いた。

「弘子さん、好きな人があるのでなかった？」

「いいえ、私、そういう人がなくて、淋しいんです」と低い、はっきりした声で弘子が言った。その言葉は弘子がいま衝動的にそうしているのではないことを語っていた。

彼女の手はまだ彼の背中にまわされていた。

「よそで君に逢いたい」

彼がそう言っ、弘子の頭がうなずいたとき、その髪の毛は安芸の唇にふれながら揺れ動いた。

二人はまた書斎の椅子に戻った。関直助から、来られないという電話が間もなくあった。

椅子に坐ったままではいる弘子の表情は静かであった。ただ睫毛は伏せたままだった。私はこうする外なかった、とその表情が言っていた。

「僕はすいぶん長いこと、これを避けて来たのですが」と安芸は低い卓越しに低い声で言った。

すると弘子は、上目づかいに彼をちらと見て目を伏せた。私も、とその目は伝えた。この人は、静かな表情のまま、何事でもする気である、と思ったとき、安芸の身体を、ほとんど性的な快感に似た喜びが走った。それは人工的な、細心な扱いを必要とする情事のはじまりを思わせた。二日後の午後二時に銀座裏のレストランで逢う約束ができた。

弘子は、洋画壇の老大家の甲斐青洋の末娘であった。安芸重吉は前年の夏から甲斐青洋の画集の編纂を企てていた。諏訪湖のほとりの山の斜面に構えた温泉つきの山荘から動きたがらない青洋のところへ、安芸は何度か足を運んだ。安芸重吉は、重要な仕事を始めるときは、難かしいところ

は自分ですっかりまとめ、事務的な処理だけを社員にまかせる習慣であった。諏訪の山荘で彼は青洋の末娘の弘子を紹介された。弘子は無口でほとんど無表情なのに、その目の動きだけで羞みと同時に素早い頭の働きの示すが、安芸の心を引きつけた。化粧しないままで膚の白さと姿の美しさとを見せているこの娘は婚期を失いかけていた。それは、偉大と言っているこの老芸術家の末娘に生れたその境遇の重さを語っているようであった。

安芸は青洋の紹介状を持って、何軒かの画廊や愛蔵家のところを写真屋を連れて写して歩いた。その仕事が終わりに近づいた秋の末頃、彼は甲斐弘子の訪問を受けた。青洋は、その画集に入れる作品を変更したい、ということであった。初期のものは一つの作風ごとに三点ずつ取ったのだが、甲斐青洋は、三十歳を過ぎて自分の作風の確立してからのものを多く生かして、初期のものは全部で三点ほどに減らしたい、という意向であった。

そのときから安芸重吉と弘子の接触が始まった。青洋が今度画集に入れないと思う作品の中には所在の分らないものもあった。またやっと思その行方を突きとめると、ひどく損じていて、使えないものにならぬものもあった。一応それ等をまとめて色彩写真に取り、青洋に見せてまた相談した。ほとんど画壇から隠退してしまったこの老人は、頑固な上

に気が変りやすかった。作品の選定ばかりでなく、解説を書く批評家の人選にも気難かしさを示し、仕事はまとまりかけていながら、いつまでも最終的な決定を見なかった。そしてその間じゅう甲斐弘子は諏訪の山荘と東京を往復し、渋谷の姉の嫁ぎ先を足だまりにして、安芸出版社にしばしば顔を出すようになった。

今日から、おれはまた心の平安を失いはじめるのだ、と、水割りウイスキーのグラスを手を持ちながら、安芸重吉は、自分の心に言い聞かせた。だが彼は怖れていたほど減入った気持ちにならなかった。他人の妻である栗須葉子と身体の交りを持っている間じゅう感じたあのうそ寒い、滅びに向って歩いてゆくような犯罪者的な不安は、いま彼の心になかった。そして甲斐弘子の白い額、大きく見開かれる切れの長い目、それから少し乾き気味でいつもかさかさになっているルージュを塗らない唇、形のいい脚などを彼は思い出した。弘子が靴を脱いで座敷に上ったとき、踵の高い靴を穿いている癖で、あの襖の前で彼女は爪先立ちしていたことまで彼は目に浮かべた。何かを言い、何かの意味を表情するときも、彼女はもう一つ別な心を取っておいてあるような静かな目をした。それは、冷たい張りつめた心でいるように見え、時としては何か湧き上る心を押さえているようでもあった。

安芸重吉が弘子に心を惹かれたのは、そういう一種の性格の厳しさが、その顔や姿に漂っていることであつた。それは彼の知らない弘子の過去につながっているのかも知れず、また破壊と分っているような仕事に生涯を賭けたその父の性格を継いでいるのかも知れなかつた。そしてそれはまた、甲斐青洋の湖や山を描いた具象画に漂うひっそりとした厳しい雰囲気似ていた。

弘子が、画集編纂の方針を変えたいという青洋の手紙を持って安芸出版へ訪ねて来た日のことを彼は思い出した。

そのとき安芸は、弘子を三階の書斎に待たせたまま二階の編輯室で編輯主任の奥井道太と相談していた。奥井は、編輯方針の決定した甲斐青洋画集を、もうやり直せないからと言って、そのまま出版することを主張した。それはちょうど甲斐青洋のイタリアの展覧会に出した絵が賞をもらった時で、奥井はこの機会に出さねば売れないという説だった。安芸はそれをなだめ、会計の宮崎徳一を呼んで、印刷所の支払いや大取次との金繰りの都合を問い、甲斐青洋の希望を容れて予定を変えることにやっと決定した。弘子を待たせたまま一時間以上もかかって彼がその話をまとめた三階へ上り、書斎の扉を開けるや否や、弘子はすっと立ち上って、彼をまっすぐに見つめたまま、

「安芸さん」と短く言った。

彼女は理由を告げられずにあまり長く待たされたことを侮辱と感じたようであつた。安芸は黙って扉を閉じ、彼女にもう一度座に就くことを願って、事情を説明しはじめた。もともと、甲斐青洋の画集出版は、利益を度外視した彼の道楽仕事であつた。青洋は高原古実のような展覧会の審査員とか芸術院の会員などという社会的地位や経歴のない素人画家であつた。もと彼は南信の大きな地主の息子で、一時代前の前衛的な画家たちのパトロンであり、若い画家たちに取り巻かれて、芸術的な雰囲気を楽しみ、言いなりに画を買ってやる美術の鑑賞家に過ぎなかつたのだ。その青洋が三十歳を過ぎてから突然絵を描き出した。山林経営や製材の家業は弟に譲り渡し、諏訪湖を見下す山の斜面にアトリエを建ててそこに引き籠つた。そして彼は、以前彼が絵を買ってやった画家たちに軽んぜられながら、季節ごとに若手の集まっている展覧会に出品し、義理のように一点か二点ずつ入選させてもらうような生活を二十年続けた。甲斐青洋の絵は進歩しなかつた。安芸の亡くなった父はよく、あれは旦那芸の見本だ、と言ひ、そういう馬鹿な立場に陥らぬようにと息子の重吉を戒める材料にした。甲斐青洋は、どうしても当時の流行のフランス風のモダニズムの絵を描くことができず、竹田(ちくでん)を油で描いたようなものばかり描きつづけていたのだ。その間に彼の庇護した昔の前衛

画家たちのうち、極く少数のものだけがまともな画家となり、それより少し多くのものは名を成して俗物と化し、大部分のものは行きづまって脱落した。時代の変わり目が来ていた。

甲斐青洋が五十歳を過ぎた頃から、批評家の新しい層が現われた。それ以前の批評家たちは、いつまでも彼を金持ちの旦那芸としか見なかったが、この新しい批評家たちは、甲斐青洋の絵に日本的な造型法と洋画手法との最も効果的な結びつきを見出した。更に戦争後には、ヨーロッパやアメリカの画壇で日本美術の再認識が盛んになった。ヨーロッパ流の絵に成り切れなかった青洋の作品に注目が集まった。そして、海外の展覧会に出品する機会が彼に与えられた。安芸重吉が青洋の絵に関心を持ったのは、その少し前からで、自分の所で出している美術雑誌『芸苑』に何度かその作品を紹介し、三四点を画商の手を通して買い取っていた。

安芸重吉は青洋の作品そのものが好きだった外に、甲斐青洋の生き方に、子供じみた共感を覚えたのだ。それは、画家たちの庇護者という、最も重宝がられながら最も軽視される存在から真の芸術家になるという、芸術の世界では極めて希な例を実現した点においてであった。そして安芸重吉自身の仕事、美術印刷とその出版という点で、芸術

家たちの庇護者か画商に近いものだったのだ。その上、彼にもまた詩を書くという妄執があり、大学の文科で同人雑誌と一緒に出していた時以来の友人酒匂光と協力し、自分のポケット・マネーで小さな詩の雑誌を出し、それに詩を書いていたのだ。

安芸重吉は、父の仕事がこの出版社に侮辱されたとしても、そのような弘子の険しい態度に気押されるように感じながら、彼自身の青洋の作品への傾倒の真剣さと、出版業というものの計画性や経済的な事情などを手短かに話し、自分としては、青洋先生の意志にできるだけ添うつもりでいるのだ、と言った。

弘子は、彼が話し終えると、

「分りました」と言って、彼の方に大きく開いた目を向け、ゆっくりと一度目ばたいした。その目ばたきは、彼女の思いちがいと非礼を自ら認め、それを恥じていることを安芸に伝え、また安芸に対する彼女の新しい信頼感をも伝える役をした。そのあと黙って弘子に向い合っていたとき、安芸は急に胸の迫るようなバセチックな気持ちに陥ってしまった。少し困ったように両手を揃えて膝に置いている弘子もまた同じ気持ちでいるようだった。そのときから安芸と弘子は、ほとんど説明し合うことなしに、短い言葉だけで意志を通じ合うようになった。

あの時から自分と弘子は相手を身近な人間に思い込んでいたのだ。そして何かが起る可能性が、いつも黙りがちな二人の間に漂っていたのだ。それを自分は軽いことに考えて、今日のようなことに直面するまで不用心でいたのだ、と安芸重吉は考えた。

高原古実のそばを離れた水谷暁子は一度室を出て行った。しばらくして戻って来たとき、暁子はふわっとした甘い香水の匂いを漂わせて安芸重吉のそばへ寄って来た。そして娘らしく、軽く

「こんにちは」と言った。三十歳を幾つか過ぎた暁子にはその子供っぽい言葉が少し似合わなかった。それから彼女は、その首の細い、ちょっと写楽の絵のような顎の張った目の細い顔で、安芸の方をのぞき込むようにして言った。「私、知ってるわ。安芸さんは詩人だったのね。何て言ったらかしらあの雑誌、あの『天の蛇』という名の酒匂光さんとの二人雑誌を見たわ」

安芸重吉の顔がほてって来た。それは急所に不遠慮に触られた動物の怒りに似た気持であった。

「いや、『天の竜』です。あれは学生時代からの友達でしてね。私のような人間は、人さまの役に立つものであれば、頼まれれば何でもするんです。本や雑誌を作るのは商売ですし、酒匂に頼まれると、雑誌を作り、埋め草の原稿も書

くという次第で、まあ資本家兼引き立て役ですな」
「そうでもないと思うけどな」

水谷暁子は安芸をからかっているように取られるのを警戒し、次の言葉をためらっていた。その女らしい軟い気配に彼はかすかな嫌悪と冒険心のときめきを感じながら考えた。美術出版を業としている彼には、女性に近づく機会が多かった。それは彼の経営している『芸苑』が絵や彫刻の評論雑誌として権威を得るにつれて、その雑誌での取り上げがたが新進の画家たちの地位を左右する傾向が見えはじめてからのことであった。そういう力を今の美術雑誌が本当に持っているとは彼は考えなかった。しかし世に出ることを焦っている若い芸術家の激しい競争と嫉妬の中では、ちょっとした編輯上の扱いの差が決定的な打撃と考えられるほど、若い画家たちは神経質であった。特に若い女の画家たちの嫉妬や、弱気の拗ね方や、厚顔な自己宣伝などを、安芸重吉は時として痛いように感じていた。

そのために、彼は女の若い画家たちの彼に見せる親愛感や甘えなどを素直に受け取ることができなくなっていた。そんなに過敏にならないで、仕事の質を高めるか、少くとも仕事の中に人間的な迫力を出せる画家でなければ結局はものにならないことを彼は知っていた。おれに近づこうとするのは非力な甘ったれの女画家たちなんだ、と彼はそう